一叢抄

四之三

特別
ヘ12
5127
8

澪標

并一 蓬生

并二 関屋

絵合

松風

澪標　遠遠　識盡

巻名ハ哥によりて号して源氏君廿七
歳十月より廿八歳十二月までの事
あり廿七歳ハ明石まての事と同年也
外モ月に御ハ譲ニ給ふ　宇多御門
寛平元年九月に古院光孝と号す又り
見給て御ハ譲ゆとあられしりと書也
かりや　見え侍る
物此むくひありぬへく御座し侍る　源氏と
大君のあしく御たはし御門ハ古院のれ
遺勅とおりしめれよりの京のこのあし也

めされしハちうくうにまいらせたまふとなり
大宮世の人もあいなくうきて見えしとし
さて大宮のあいなく思ふくハおほく思ふ事しられ
うきまゝにおほしよしとなり
やもめ世路　西大臣なり　此右大臣ハ弘徽
大后　皇太后宮なりへし　前東宮ハ大后の
女御のハいてあらくなかれて　まゝしき
人のむすめなり
源氏ハ今上の御子にして御門の御事に
めでたき人に是とし　源氏の御子なり
御もとハ次第にまりし之八は今まてしる八

まかつりさりしとなり　帝の名なり
春宮御元服　冷泉院は源氏の子
八歳二月なり
かはりさまおほしきたまへハ御子のうしろ見せさせ
へよ御位をゆつりたまひてのちしかりし事也
きこゆなり
坊にハ承香殿のみこ　ととは此御子なり
被成まりて　一説　被とハ右大臣の大臣になる
俵西殿右大臣外に内大臣の官となり
御いとまなり
やそし世の事ありしと云ふへき　源氏物語

政を致へきよしあまたゝひ辞給たり
しのかく摂政を給ふ　天皇御元服
の後さらにまた関白の時ハ摂政と云
とはに復辟の表をたてまつりて後ハ摂政を
あらためて関白と称す　太子元服の
後又致仕の時摂政の例ハ清和天皇貞
観六年御元服ありて忠仁公良房摂
政の詔を蒙るは例に准すへし見花鳥余情
人の国にも此事なり世中をしりまつりハ
商山の四皓に紀の給ハりけれハ
と呂太后の名乃いさめしより高祖乃

前し朔をしつハ羽翼とてよるれり
とのたまへる事なり　見花鳥余情
なり逸めしもありけれも　辞致仕の人の文
摂政すなはち忠仁公摂政例なり六十二
の年齢を極めて遠なり
さる折にも着　紅梅の衣をたり給
未た昇進もなくしけるのみとはに母く
こりなし
大殿なとの御着　中比よりハ太閤殿大
殿とはれなりし後は前ハ西しも
ことなりけり摂政大臣との人ハとよく

ニく太政といふなり　又二つハ太臣
と太殿といふもあり次
右姫君の世にありし歌と　きこえしへの判
のみならずそへて加判なとも
兄頼なりぬるすゝのなけしまとかりも
さらひのありしとも先にかりひなけれ
いかにあるまし［き］かなし　云々
ここに中道にはまうすのは法華んてすと
人ならぬひてめてたかりひきまへく
此世にあらん　法成寺
ことにいかになりて通し給はやけることし

御子孫法圓寺まりまして三條右大臣
ふかくしれ忠能ハ後に三條なり
あり二つさりて　冷泉院久寄ようりて
母まして所ましまれなり
すくなくれ御子三人　若君をきしの
まてに宿曜師の勤るのなり　御門を
中の姫君の八太政太臣母く
あるせて中にも姫君といへり但久貴ハ
竹河よ友大臣也し兄にありも後県
色物縁よ見くさて後あなし太政大臣ま
てありあへりのことしもあるへし物統之作

にさゆかりふかく書なすへし
大方つゝなき位又のおり　本文ハ相人のい
ひけるの事をきゝおそれて
さ人にとて こしちくせうはかり給ひけり
源氏にて王位ハ宿世の違ひてなり
とゆく末のあやまりしこと　相人のことも
ちつくあるへきも行末もしらりしとなり
宣旨の娘　宣旨乃名ハ上の中将或閣白
家にもありむかしハ院にもしるしあるへし此外
の宣旨にてハ名和歌の集乃中にも
あり女の官なり

右大弁の宰相　学知ふかく右大弁にてけるる人に
あつらへさせまて子のことをきゝ　此ことを
衰なりにいひ斜めならぬ愚かへし
このみまゐらせてありしかとも　明石の姫君
の源氏のとゝろへしとかいさぬ朝にしも家にて
も源氏生給ふありへし此日あるく
くらちと見ゆ
しつけ乃別を知しむ　めみとの別を知
みなてつけまて知はしめは明石へも
おさひ給へしのこゝろなり　いてうしと
ハかゝめゆるこしとえたなり

御なかし　皇女のれなかしと合てそのへ
陽明門院よりの事に　御博士と書
いつしきも神よしのきん　ならもつきぬ命々
いよくいよりしら地そろうきまて　明石の
姫君とゆうし守なく地りよなり
ひとりしてなつるハ紬の　地深よなくりぬと
ハ源氏の御まくて見のうすなり
さくらあなた進あやしく移らきうらまき
なりや　世のなかひさくあれしなり移ら
けくらハ寝てましもやもりよへやうしもなれ
やとりよこゝろなりや

いとくらしこそてうくらなかりしかゝ
源氏の御詞に云、御仏のあさうぬふ
地もなれなる物えんし　云移ハさうなり
なしひとく人のへよりおなるとハ地りひ
よぬうすとも根移はよしなり
すし比あ次第にと思ひ聞し移し御へのく
わらとも　地りくの御かきのつまひなしれ
御け世なしまうりのうちきひしくあま
御子は云りを移しりし第一との御
中の御なりしれなると思召世上ハ余意
すのようり御伯てうりしすハ不来ゝ

とおりしなりとうちきゝ過給ふとなり
源氏の御心なり
此人とゝまりて　源氏の御こと葉なり
義なりし夕の煙　明石にて塩屋く
けふりあちこち過て後なひけりとありし時
のことなりといひしそのことは前此なりのなりてこゝ
見しとくちなひく方と八　源氏君此あし
出くけふりは同方になひんと思ん給ふの
ことをり給へはかくとゝもまろなり
又夕の煙なとのことの給出しけれしに
ゑと給なり　先さしおましと八言ひつき

こゝ本へしとなりむかうころなり又めりひ
のけふりの事をやとあり
ゝ過しより世緑こと山に　むさし野の
とふまなしくき墓にはまのさゝ
くらきよりそめ過とあり
いふにあまりけん　四十九日此説に
たゝ事をいひなひあかりさゝ
都にてあらしのことわなり
承御むくをゝけ事しつけてそ
源氏の心の深浅を明石姫
君出生し給へる宿世によりとなり

くこ根やけそくらうなき　御通乃祝なり
去しなかのあやめハ五日のあやめよ
ろへきりいてハいりそとう入とり
やまとの衣あく　唐との錦とみへり
岩かの中君あり　よりきなれ人
老うの山住すミしてむかうてりめるなり
恋をいとさひく　御りひよりりめかへの左
うし隠くなりといすへなり
あち道ててよそろのけひ　めなくとへなり
牧なるねこし御る道て　いさし八十平目と
文へよあり

もけよ文路へむかて御　御名上の文
の神の呼さ気なりやうし文さとしとも
かくへき人なく孫ともに昨君の事しえ
六のひ路よ友なりたへし
まてしりとくて　今日夜はなうかりとくて
出て舟の気とハよそてへとてしめたれ
同しくい路ち孫　残清ひとり事始
きてそのめ路すしあり
やむこしなき人へ参らしけなると　上﨟方
そてそつりとハありうるし少しあり
めつてきく御めみしろてそのれなきうと

むかしのことはさまなり
思ひかへして語り　かれハたれとハ源
いのちさへなよしなりよ紫上の事よ
此月比語り出へりしより後の事なり
月ゆふぐれよりしに入て　十月西乃方なり也
月はさぬる夜の事也
水鶏とよ語ともきこえけれハ　源氏はおもひ給
なとか月よ毎に戸をさゝり水鶏の一聲よ
興とりよりたゝよしなり
とかへしさく水鶏よ　うちの宮なる
とくハ気ゆるめぬ人をもかへよしやう、

女にて遣さるまなり
なとてかうひあらしとはいゝしもぬと云きん
むかしの宮は今こそ源氏の三月をあけし
そのと一方のやうしかりしことを憂方
かくハ女いめんもなくて打なし歎
そのおもひにて家なる見なくハし給
たゝ女ていなり
世にしたんなるといひそしたり　源氏此外の
人よハなれしとなりぬをしれ此ハなりなり
かの人の家しるしりて給ひて　女君
なしやうの人をつとへて明石の姫君

申しの御くしろうそんはりしかはせてあり
法院の御かはりに　東院へ中宮の兄所おか
くとハ二条院に對して云ふにや
よしあるさとりやうありしと見えりて　是たなり
是受領なとのおかきてほくらせる
はなりと　凡荒也
中宮所ちかく御かくしらかはほる
中宮とハ今とおり井かんてのとる
ふおりしませハ皆春ハひまをおさせ
ぬ事なりさうらくしとハ源氏のれハこ
東宮の御母女御　承香殿女御にて

梨壺にて春宮ハおはしませハしつかなりの
御へおはして　あまり別當にたちしまゝ
ふよりて昭陽舎にておはしまさんなりとなり
くまてを傳言よ来るよ表しとのよ
ありかてハ源氏の御はからし桐壺か手
梨壺といふ所にてなりとのん
入道后宮御位をあるとあさせ給へよりも扶
御ようらとえへかなしくハ皇后宮と
ふありがたき孫なれと
古き天皇のあかへて凡にかりゃ世継
女院ありしハ御信にてつきせさて院よ

ありけるも一条院事とハ本と天皇の御
号とハ申なる也但封戸ノ年官年爵
なとハ尊号をうけ玉ハねともなとハ
戸給て御封とハ封戸之三家ハ各千
五百戸なりしを本と天皇は各給へて二
千戸給けり給へへなり院司ハ女院方
のみつきうる判官代主典代すへし
とそハきれ申して　雲客ハ源氏とよふ
もとうけ給へともも源氏ハ之りて奉へ
まセつけまくり給なり中くいと神
しなるとハ源氏のくりんしかりけさ

まは之り世人をやもとくれとハ雲客
の御名は世人のよふんる事なり源
氏の性名とせより
三部の此御子とし　なりての世にハあまねく
源氏の大臣此人としハ左近の[illegible]
扣とも之を給ひれ旧雲客不出のつき
さ達とも　参る文よハ之付のきらめ
とも世給て雲上の中へも雅とまけ
ぬ性源乃を給はなりへし
権中納言此御娘乃乃との用し　冷泉
之後の年此まなり弘徽殿女御此事

十二家田掃木にかけし
いつくしからんとおもふらん　家女御もなれすへ
弟子の詞に源氏君俤執して給へありけり
その秋行幸ましまして給　源氏木八家
の様なり御葉関白例ありやかれし
村の事ともなけり
色うつし八きらぬこし　明石の懐妊
けふてこその秋こそしのまねき気
猶悔無かり
いつくしきかんなるらん　藪室の神前に
楽人そ淡路く　東抱の舞十人に

ふるし舞て哀末八面照見えけりしいは
ねき着神社の列葉関白の賀茂歳
表自猶すそれめしらして神楽まて我
子方し舞てまた後方勝まてふるさを
すみのありとの常八左右との官人も
とつらむ八情源時祭まて八扇雪
容舞人より
されつしけるなきましてもりかねさせく
くらおもしきかれぬのねさし　すく勝
かくして句を切て分く残し
りおの順を立てき分まてしらく　旦可開し

はべりけり侍ハいまだ法たてて　ほとゝぎす
きみとハ先世の前縁のあしきれとなり
みかどハつゝしみくるれバおれとなる
てとハつしよりしのまりきぞなりと
凡児なまわらしつぶゆりけり
人のまね乃ことをしれバ次
む
世をもあはせもたりも　位しりて
後涼あるりとしよかり
六位乃中にも蔵人ハあ法多うく
一説
麹塵の袍とも多しいひとも掖庭
の蔵人もいふなり

ひとの正つれうるなし　中河の紀伊守
末なり　御家の後りとの位しかりて
と文ゆはいの尉まで六位蔵人並より
よし清も同上けまで　廷尉とは違非違使ヲ云
八おほ衣とおもすなりなり位なり人なり同上
あさま家の作の事なり
河原のやとの例とまねびて　忠仁公の御
事なり　謚云の名なり不一決云々
一説
忠仁云良房公也　文献公基経
あるハ国史ならしもちまされさまと
をくのことり正つかさぬなのをまてし

はれくもりしぐるゝハ卯女流しくなるへし
或説忠仁公白河ノ院ハ河原左大臣
と号す法皇殿并陽成院と六人なりしまゝに
そのありし旧家末の家ハ五十町に水千やある
衣よりや眺めけるハ只やなさいと申は
へよみやうと 見え候

大殿ごもる君 久宮ハ京之源氏
二十一の君にしてれ給へり
雲井なる人の前末をさかりけると云
神世ハ見しはよのつれなきへ給へきはしあられ
まゆ八つ折りの神なくをまどふへし 紅

一 菊しあはせの神やうへきんハまつり
住吉七社ゝ物ハ 惟光か奇へ先ハ初し
まさにより神代ハ昔えゝのおほしめし流
今まゐりしけの事なり
なかもの流ちるへ七瀬したがひ
むかし代始し八十島祭ハ難波にてあり典
侍の人流衣をもちて気附て解除
するのことにあり其皆難波のさるへの例也
一 祓
七瀬の流祓とその世しも毎月をす
ありそ所七瀬遠所七瀬と云事あり
大七瀬といふハ川と山七瀬也文賀茂

川よ七瀬のちらへの事あり
ほり江 を 仁徳の御時始てほりさらる川也
いまちくみなり　為綾にくしても也あ
ちんとれかりよのころあり
駒ちへてうしろ名　まへより八御車とる
毎年のく御しるしちき　明石のと相撲
あり御ちらへのかりかに八木綿し
つけちらるへし
日よ道てらしまりゆく　以下の行事補へ
くはにくしあひ乃まくりくさへ
かかりとハくと女いめんすと乃

事あるへよあつねとも　かりかくさへ
まさるのといちんとてさへと代への
ちちなるへし
露けさのむしれひかくら　名しハこれ
是ハ難波とまへしり毎しり毎こ
乃の御と名よ記名道ぬ神しろあり
宗ちとりよみてしあん所をてむしれ
みなちさ浪さしの事あり
そらのまくれ　道すくなり
あちひとも　極安ちくなるへし
さ道といてやかしきちのも　源氏の

浮ハかり上手ならさへ仕損せし
あしくめれと浮所んして大方世
の人のすゝとかる故て人のうしろより
よみ給へりむへ候連とあり
なのめなるのとし　よく連ぬるのなり
大方の事なしかるへし今ハさやうの人
のなりやめもしくきよハ今とろ由
らぬ形ことなり　とのあるひは今とあ
多くあしきと見給て見る給なり
連文とくへなり
とや京しみちし葛らん　百首とて

法連給浮ハ新儀なり
浮ニちしらね連中ニハ　引歌ハ不付給
さて中ニハやしなそしてよみ給へく
けり新儀なりとそ
内ニしやうの詠文をかけり給　浮体にハ
りれ給へハ詠吟もさしかけり給けり内ニと
やしハ例の記者も聞つさて
くとなり
昔をしつ連なりけり　大かたすまひなり
なり中くならんなとりけしハ源氏乃
浮ハかりの深さなとハ見しとしかりける

なりもすへしなり
家ひろく　開字ともいへりて上臈しけれん
隔てもつきかりけりに　弥家にてハ經文
ともし見物をぬすみなり
ひけしきすらしてハあへ秘と　懸詞く
御方きてはあへて少しなり
ちくさ源氏つきに　几帳なしへさてみれ
すみけり
さらぬハ所しみえしハ　源氏の詞ハなり
ともかし世中とさへしひかりしハとれさらう
さまれ御法かりしこりまて

ゆかりもむつれしハなり　弥家のれを
仕様を見えてまつれかとりしなり
こやくやしく源氏のあはれまてを
うれ見なきへさりしえもしての姫く
いとさきその内にもんひしく渡へよ
源氏君の詞なり　源氏ハ女ありの宇治
の姫にしも世方のけれひハさうともあり
てよ事ありしなり
宇治方とつゝ御しとも　方にて
人とまうしいふのなり
ありなくもの姫のかな　あらさなく

こまやかにゆかしのもとちん　けしきにて
又人々なりやいの絵をかくし
ゆかしかるらん此　秋好と相並
帝の御このやうしあり
さてやかましきかくに　源氏の御年
の子なりあれは人をかきそしは御子
をあまたりさるなり
御そうのひとすさしらかきりて
りろ八そ給ひしきかりしうちなり
いとゆめのりけし年比の御かへかりなし
ほつて　源氏の御ゆ給ひかそし

人を後撰乃こゝろなり
家の人々教をうけ　内そうれ此佐のすけん
御はらし給ふ　源氏の御事なり
うちのし関白なりけり　是ハうちの記者此詞
ありしを逝ひまかりき　定て　御息所乃
御しうおはしけれハうちさりしきミハ定
かゝりてしを見給へるんとなり
定此御ものうて　帳者のこゝろの御なり
此絵ハ又御よりあり
きこえさてよろこひし　ありしを
あるぬ御ありし絵をやらぬ

となり我方を通してハ凡を通なり。
うへなり
例の引むし　例のとハ源氏の性なり
老を過ゆかしう思すと云り
人をさかしもとてのりすれとも　外に通しくく
句とさりてさハあるましきわさと云
ことらとりつなり
女別当なりしをかくて　秋好の家
の人にてのなり内侍所の官女又ハ
主殿なる人也てありとなり
此人を通してこれをのましくれと

秋好の宮仕のれうにて源氏の御へなり
御親みしハあるまじやありきん　作者筆也
朱雀院なとして御たちかへりの宮し　朱雀
院の御妹なりしの子なり
人ハいとあつしくわりしまれとおもひて
朱雀院の御病之まうてしたなし
まちを操へなり
きやうすとさ分しとりしれまうしあり
りとてしてねて紀めけめと云るなる
源氏の御ともなり朱雀の御かたの
なりよしの遣ニはきくとよてハ凡ん

まぬしかくとすり給へりきこゆめとけ
さかりし人なりとよりおほくなり
つねの流ゆいゑんとならひて　さうけてん
わかれ流宗しきありて　是より源氏
の流となれりさきまつりてしまる
おほくの一流のなさとハ秋好中宮
のそのとよくさひおほつしよりつくまて
あしくなりまへとしおほしとすりま糸にのゆ
みとハまかりしとあぬとりとなかなり
又流門のわかりとさるあつひおほとく
流書へきらきてよ中おほく　世人座

いにしへハ朱雀院よりのちの世尊寺
いとあつかんとすり
後京ハけしきたてぬやうして家かならすしさて
まうんと見れ　たしめハ入道家の流
なむきのやうしきく後京ハ宗しまきま
いきんの流ハなりけしとハ宗にはた流
なそしてけるよして双成の詞に
女房なりせ　むかしのこへなり
きつたん為をそひ承して　さすんと
なとゆへなき廃し
三義の流子まて　中納言の女とかいへる

せゝの御子よ前し給ひて
宮の中着や　各々　斎宮ハ御母宮
そてさくありてし女のまきしさけり
好かりし見く考えり
乃御第執聞し給ひ　於前御内
りのまと入道宮をし侍のあるへ
りとあつしくのを　入道宮の此事へ

蓬生

巻名ハ詞と哥とによりて号して摂
澄之乃巻なり源氏君二十八歳此より
ありしとつらしの君の末ハ廿八歳の
十一月よりのましの事ありし君を
小侍八講をしのみありしとりて
の同廿七歳の十月よりの事なり
又此八歳比卯月乃比まての事なり
て又末のことして二十世よりしこと
かすめあひて末乃院といふ所ときん

後乃ハ源しさてまつりけるとしあり
三ケ間まてハ照りなりぬるま
や　花鳥ハ横笛云々
もしくハ逢ゆく　朝平ハ云ふとかて源
氏乃れ近の世ハ子のとけり
竹の此世乃うつろひわしとも　いせと侍
もんとて　竹乃としときゞめなり
ひかりの家ハ最ハ　末摘の子のん上なる
ことんともハまつじの子りといらんと
てまりくくの子りといひきとり
大宮の卑ハひりとめくひの水しらり

しゆり久しして　和　七夕まり合付るをすん
宴のへハ大宮まてハまりゝの光あれ
そうや小水の内としハ是ぬ乃をとへし
朝ひ三つ出るやうまて　尽まてとは
またひハ三逢路をぬやうなりへし
大宮ハ世のすとハいひあくく　源氏乃れ
近のあしさハ無別ハ子なれとも又れ
方なきハ許分なる逢ハゆとり分のく
のやうなりとあり
御方ひありつきまとりしあるさハくてこハ
さひしきし住なる逢くらハの子のん

女あるし　女えたりてをけれ人をあるしとこそ
こもり林のすまゐ　鳥鳴松桂枝孤巣
蘭蕙蘇依文集送宅乃詩之送ハアレ久ル久之
松桂葉菊花具あり草木をも芸ぬ
世ハころものことしといふこゝろなりけり
所ありるなり
こ女まうすと　こなまハ樹神なり
ゆりうつさ家作りこのむ　このむもの
投言ものとしいふこゝろなり
木さらと　けふのこゝまひのゆりうつき
すりと木さらとしけり

あないましや人の門出もんをすもあり
心遠つし乃性なり
親の浩氣のまりゐるかりすなきれ
すゝかしとまな
論語
枉道而事人何必
去父母之邦と之り来りし者への教ま
源氏の子をあひゆしなり
なま物のせ人三くんと押すつる人　押ほとれ
さんと押しまい人といふなり
いゝかよくして　さやうの押しすきたく候
まさとりの人々の人りをさせさまへる
個友とも押乃ようの名ありまさ

世おさまらずと聞ほとなる人の両の足すん
うちにハ　さようにいへなり
いやしき人の家のさまりともなさん
礼記
宗廟之器不粥於市　犠蘭ハ法
あやしき法師といふ中にも　木法師也
いふ説不出玄歌同法師ばかりへし
そりきつしいかいさと　つれ〳〵のまゝなり
めでたき人なといふ　賊負家ともみえん
せといふなしの也り
ほやうしついたまさ　東坡か詩に負家浄
掃地といふなしりけり　見え元る

まじらぬ事なさらりしきれ但子語て
木の端之ともいふれ着みまいなかとも
みえしへなりし文のよりしなとも　女よらの
黄作なしとも　つゝましくこぬまいなり
かくとりもやのとし　くやひめ
河
唐守藐姑射刀自薬変雄
いつ迄もあるまき我よりの名なり
みいとも見人ともあつり　怨よそ読之
みんやこ　御尾張之　元此国御代
みんしといふこつくありさ御なり
とかくの人のよそある経くなきし　く

されりしかハ　此新大なこん上臈かれかすゝ
つまひさしりし新院　此新院をまいらす
そうかれハ人をもむけして文をおくりけりハ
兄
播磨の守北の方にて一向に文をおくりけり
ハとて文領の少将のもとへかへりまいりけり
もとよりありつきたるさやうのあそひの人ハ
中くちきこ人をまねしけれハいみしくこれハ
播磨のもとへのまいりいとゝしたしきまいり
これあつまりしのふなる人のまいりけり
本性不思議なる人の書あつめハ中く
思ありし上臈しきりにいとこのまゝ様

いへともいかにまいりあり文やしとな
きすしなりし人なきをとむしみ道々へ
ま宿世にや文領あての妻あまりて
いもりはらしきをあり書きりむしかれ
ともかくしとこそ
北面にて　播磨のめのとの子なり
武家のあまり　大蔵文書ね　播磨の
ともかゝこのまなり
こそまれ　こともはくいひ候なり
うけひそり　うけりしけしいさり
されりもしけし世中しゆりさ道をひて

けしきハそのひしさくのへなり
もえ出る春て　源氏の女三宮をほりし
源りすいしてもとこそいもなれとん
女ほりつて　い屋しれりの花のさかり
秋かひとりのこ　世中ハ昔よりやハかり
きん承かりとりのとめしなれかく仏の
源氏人へのそのと前一のやさしいすとん
佛ひ三りも臣さるさとく　如是人
雑度のこゝろあり
世乃さきけを見て女らにと　とめてき兜
見しぬらゝへいてんなりハ

秋かのくてとられさうなく
ぐ末摘のこさ早蕨そて との
めつし鏡し女まふなり
世いろけの人乃なんそて　まつりゆりいへよ
ありもあらし次　古飛の人乃ゆかしてへさ
みやあるぬとなり源氏の性のたく
連とりしよりてうる人とともこえりてあ
あれとしみかにとなりくし　みかしろ字ある
小字なり
冬しありゆくましい　春夏よれ連ある
ろなりらるよあしけまきの前といひて

そしらけるとしひつきつゝん方なく
しハれはく方にもなれりていふやう此ゑ
此院の法ハあし法八講　みとつらしの
まことしるし八講あり同廿日なくし源
氏木七巻十月ゆかりのすけり
いはゝ浄土　生佛國とハ極楽此すく
めのかをりつきさせし　五濁悪世此べく
しき車しのり　きよしまくつくしき東を
とくかへりゐるほとしていりくるハ孔
りぬつまづりてるのあさき人の
すゝしきなり

ひさしり古のはしも　門の扉あり
えりのほかしぬる　三径ハ門井厠
すゝへ行径なり
そし此いとつくとへ連と　此ところへ
多脳ていけり
かくしけるくえもとりくつて　聿脩
小侍従ともりえ別へしとけり
あくほきしそ恒くを極むる○
少方のよみなり長家へのすゝむけ
人とそしゆかさ世ぬへとしていんと句
とまりてかくへしすくあらむ連

字なりとし八双紙のはしに筆ふ有り
式部卿宮の御母より外に　兵部卿
なりにしし女の春し浅からりなりけれ
兵部卿とあるなるもあり
やうに　羽らしとよむなし
にしも字よハまり　作者の自筆あり
昔のくせえつり　くんえつしとよむ
然しときれの物語ありけしとハ
うつくあらせよらりへし
多極ましきさらと通し　ひらかな
連ぬかとしいつ下句しうもかたへあり

あはれなりける事あり　其席なりける
そしこの君のこともあらはすよれ
をさなく出来なりや
古まくみの縁ハときし　作者の母みまく
上の事しとゆましきさらしとみえ
あひしもはあれなり
むつましさえても居まし　多田社ハ
石祖社の事なり
うしのさて山田ひ居海、　住吉物語
りやえひの末て孫物りひや彩々
本とひかはゆくひあり

佐うしのさゝ山ハ越中の白山のやうへハ
越之又ひのさゝ様ハかの山しや
かの山ハ地ほくハひの図にありと也
まさにくちむすめすのり字のり孔を
よくきゆかれに後師のかしとけ云なり
又ひのさゝ様とはかのハ甲斐がより
小なる道ハ夜をうりし大竈ありて云成
るかあまりやひのさゝ様としけり
ちかの御しれ　比りの所のりかあなり
そしのかり出　源氏二十八ハ宗なり
卯月ちかりに花ちかの里とかほどに出く

花散里ハ卯より夜に縁ありと見ゆれ
大かたの杉し夜のさゝかりて月影よし
なれ人のいけの内さもものえんなり
風ありつきて内に白に　人をなきさ宿
小白つの夜の此風しろきまちひくて
なきこしけふの夕もあかへしうちちう
とりきあのしハさひとの中より夜
のきゝの方に次もし白にのきなり
梅まつりて　此梅あらし様し又ゆし
とまりむちちの里へ出さまにきこしれたり
なき道ハ地ゆひ出様にみなり

えやう此事よりありといへり　見て後に
すゑ末まであらしかりてやみてしまにし
の事ありとかはしもしなり
く見なりてゝしいてよ　人のきく
ひ住てあしもまへしきれまゝ
いくなるあまき御此かく　見此なりすと
り此西きく給くあていのとしけてといへり
その孫の美よ古事の見て給　又事
乃わしき給わし陽言名九といへしかり
か源氏のことひ気まよ時ありうかの後
あつのこと世あるし給へもといへりかい美

の昔よりしけりへし
おもき人へとしつる秋の　いまさら感有
かりかくあきら道けり
いかに御しきりしに　双紙の此こともみ源
氏のことひ給ふかりけりとといへり
物はしきく御此此女房人給　物語よあれ
かもる女としといへり
真いあり孫ひ見此遣し　色なあり
そのしろやみくとていへと　そのまくれいへ
としくしろやみさしハヘ易とといへと
也へすく御世しるてもいて聞しまかの後遣と

此付ハ前句にまもり見ん入てたつねて
さて後入見ハなハえんなりたくさと末
にむのへとそさとにとくゆしからり
給ひてさもなりきなり
さり給てこそ秋なりしあ　哥ちらと
争まつすもりきハ見えへあられやうなり六
ひよりうしろ給ふへ西同に　惟光か元
見けさせ給ましき前けさみし　いつ
としてあつもきたしまん給へり
みつきぬつぬけし木の下前ハ露しまりし
見えぬつひこ然しし世家来の木

下前の露しゆき通りて　見えての
前けさハ家来ハ家来給の木下前にて
あのやうなりといへりみつきぬつぬ
といひ出してやかて木の下前にて云
此く一首の名残あるを世り惟光か
詞なりとつれ人まいるりや
入給ふし付てもいてむさくなりけれは　付て
もとハ前にもの秋と云心也　無造也
秋なる木立のちかさし　秋ハ初めちかきな
道なるなり
なりへての世しみはしゆかれ給ん　此こての

此方ハいりまへも物はつかさきすとの給
引くしきつ孫と　ゆきくしし人ハむへよう
むかりけれの音此なかりけい家の行ハさへ
しかハあつ孫と未えくありもりとれ
ろうさ給へりけり不さらく此しけると句法
切て年月此りしりしむ色し
放流のしるとく　行よ前の言てし
ゑはよらしいかし枚すぬ言給しのよそ
より見人近り紛れもれくきりや
春うしつけりけつ事乃聞ありきまるも　いま
のくあ進よると無此けり御詞あり

ますもさく笑ゆかしてりハあやしくさて
孫ハさく在て言給へ凡人ハいつくせといふへきあり
月入かりしきりて　久月来此入方なるへし
答ゆらしるる人も　河 顔叔子か事あり
む 此事未決顔叔子ハ男子て奥入り
女といつめ遠とりうての中納言の他
徒いさいれよりせよりも進ハ物としき
女とえり常緒家の子それとしあり
ろての中納言物徒よハ几帳と帷よぬ
ひてきつめかと見てハより彼物徒ハ深
氏物徒より後のものと見河海抄

塔本寺より河内は八十とあり
源氏ありしとこまうねかしか始めくるにて
小亭あり　花散里も家のあるさまことなる
やうなる所なりとも末摘花の荒れたる
さま故しけるなり
まつり源氏　賀茂祭　新院も源氏へ
二条院とうとき所　東の院なり
外のくあてしく　是に付の心ちよ
末摘の姓のなくらう女つらへき人
この文字のまへのうしぬけきうりろ
いて末摘の方とこうはゆすなりし

てけの人々へ見てへぶきれ候しとや
うて見に足るなり
物思ふ所と思ひましてかしは給
はれも時り所をも言うち方なり　言ひとは
末摘花をも女あくもとこうあぶれまえ
ざ遊びて　此詞はま面白しき
二と世をよりは此方なり　此詞まて一
五年ともよりくし云ふる間は巻八横
隠遊びなくし
大貳の小君乃あらりて　此詞まて二と世
より代りまのかしこ見ゆ

とすゝしけれ跡也　紫式部の詞也

並二関屋

巻名ハ詞をとりて号とて横並之源氏君
二十八歳九月乃事なりみをつくし巻
の末ハ廿八歳十一月なりのうちにありよ
もきふの巻ハ同年乃卯月のよりま
ての事なれハ又末に二とせなりの
すゑとしけり前よ為横歟
伊予介といひしハ古院かくれさせ給ひて
又年　源氏廿二歳なりし院よハされ給之
除くなる様の山路のうき旅の躰也
これの様をかけて出うし吹風を人のまゝ也

うとやとつけて居らん
程くなれとはよいはさらりけ也ハ之下也何し
とさたるかたらしとし云ハ風のつくとはゝ
これなる事を知りし藤井なりとし
常の流人ハ三年にて京へなれとも是ハ
一服のそのとはつてやとさゝあくすれは
きゝあつまてしるりなれしと之風
まてもとうるくよ(し)
京しありあひて又のみし也秋の比ハ京へ
のぼりける　源氏卅八歳也かくて帰京と
なり建国の但公限年于六年めしよし

申しゝ玉鬘此哥にし有尺也
車九の乳母なりし　牛をとりて轅をかけそへ
斎宮の御くたりなとやうの　斎宮又
賀茂の祭なとにも此事ありけり
関屋よりさつと引出たる　此絹
りて其との名也源
多くのあとの　狩襖をぬいたるをとり
ためとをすなり又　織物をも用なり
かりあをとハかり衣とかれし
引しくとそ見えとめて見　えまり給ひ
かしとハ宮様の名年代寄也ハ之

すうしんをすてゝうしろハ行けり
君子能好人能悪人
右近遠そけて　解官せられありしを
一日ハ蟄居せられしと　文のことば也
ミくまれ羽あすからと　紛逢道ハ
あまきとさら入せより　ミへす女海とも
見るめなき名誉を頗へり
関をりれさや承るやましく　ひきとら
のうとのうのなり
海への志つしきなんりそくありうとさすさ
こうすらよくりさ事と珍しへ也と　いうをさ

つゝきしたとまりて　へをくへし
あふ坂の関屋いふ所　関やとよめりと
いふ説あり但関屋いふなりしてみれよ
用てぬりしろし　ゆしミて
多く此君の海事とのといひとさて
とりせとのこゝろて多くふすして子ととも
ありゆいらんとしなり
此人のとめしおしとてむしのもや多
この多めひのそれ命とミてしれちもく
さもとりく拝なるへく　蝉丸方き
なさひつく道と　なさひつかり人そすなとなり

いそしかるし給へきなしろあいなれなさし
わかやなしうきへめか　むかへの河内ちか
いかいすやなしうけ人のありしかしか
作者の詞なり

絵合

巻名ハ詞となして号して後拾遺集
のよしたひ正子内親王絵合のうたにて
きたり歌合双紙の合根合なとゝ同じ事と
して絵をあはせて云ふ 見花宮 此巻ハ絵
合ハ源氏第三十巻の書なり 第九巻
のうちハ事とつくしの書は春との間
にこもりくし
前齊宮の御さいつり　秋好中宮の御事
院の女御ハ御さいつりのうち此御入内の
うち源氏三十巻の書なり 作者九巻

のなまてよろしき歌 正二月に源入内を
て三月はさやうの所あらはすてハあ波
りからくりうさしかやうり也ハ冬まて
中なへよそや秋也ハ新枝也の服く〜て
中家 落葉ニ一説 りて秋まてましく
宇治なりかくハひかりけり
そりまてありし 源氏の事ハ
大殿ハ 従大臣 源氏内府と世にいはれて
従大臣として後ニ若きすか何に
らう見よりの箱 髪の奥なる也ハら
まき也といふなり 見花の

かくこのちて 同角なり若之供納物之香
薫とのうへしとこ 花ちらし美あ
くさしる事さき物 これくなり
百ふのかう 薫衣香也 古く句ふ也となり
そうのへを世にいり 生花侍より所服の名
とよせしその事ハなりへし 又ハ源氏かれ
かゝすしとそうひ始て ひくしきれ
若作りハあられ
かくちんと女別當事論せされ
見をまいらするなり 秋好へ
多く事くしのなとれ 大やうなりなへ

さくの字を感云々
わらし さとらして 藤つゝあけのいれ
きんすのあり
ゆき 箱のうえりなり 金にて 花の
枝を作りてうへにかたり 花ちれ時て
別ちうへしとらしと 新古今の時不
快し御京あつまし乳よしの御洞ある
まなりうち迄とつくしてやちろうしな
りめぶんとくかくし八つころけなり
やく是と御所へし 付て 此猶しの
東伝の武と大方のみ好て あさましく

凡多分まゐなりつへつれ
之御多かひめ 此最勝院へさいわい参らる
朱雀院の御ゆみとしたまいて
何にしても旦 備後寺のまもし朱
雀院と根本あひ々ありなり
又御せさることも 朱雀院より此文のまへ
りしありよしき御事なり 御也あり
あくてともしけなるしと
いふしへ御はしなりつ 大殿にて此あり
若り御使と申しておはしまして
家より所の御事 ここゆりのおもしや

さて御息所のうせと思はせ給て
ひろとしてそはしいはし　これてしハ
それ桐壺なりしのち連とも
院の御ありける　源氏の御へ
内ハきよいもはなく　御門八十二歳秋
好木二歳ハなり給へし　御入内と名
子用明の事て　三ヶ年して　源氏廿九
歳なりなり給へし
みくさりとさへ　御家の御名給て
りてなり冷泉院へさいり給へり
御もちしつらんやとなり

まりの宮桐　三本まて御理とはしなし
まき女房　二条家のまりなり
きらえなる　世の人ハえさやうり
やりしきすのハあがりくるとまり
中家も御し　若菜巻ハ御しゆぎ給て
三条家よ帝し八御もちしまで給て
弘徽殿　権中納言　権大臣　息女て
二法人ハさとも　秋好
あまきらし　こさき家りや
権中納言ハ三十へ　三品御女と名なり
りし世好しよ姉好とそりなり給へ

めでたしと申けし　秋好の御かたへとて
朱雀院ハ此絵ともし進らせとて源氏ハ
いまだたしかに見給をなり
見苦なり給ふまじけれ　其その時さこし
とり給ひて見くらべしハあはれ
弘徽殿女御　藤壺中宮兄の家なり
左方興ハ絵を物し　之の御事也
とめさくゑの御方へ　わかくしうれしき
いましめて　ゑく口ゝあそびすゝめ
月次の絵　年中行事なりと云
かしはりなりべし

ひめて　かくしてなり　秘蔵して
この絵ともハ　秋好の御方へなり
殿より有ける絵を　二条の院にて
とめしきハ　古代の絵ともも此中にて
すこし当世へまあひよろしきにて
むかしのことあるハ　院へまいれ絵にて
ちってそとらん人ぐし　一向しかれ絵の
すりとろて　いちゝとりとらん人なり
そゝとあるまゝ也けるへしとて
ひより升てなかしよりハ　左ハ右書
てなくさむへりしゆへとしなり源氏

のさまハ女君を書給ひしにこれ
ころもとも思ひくらへ給ひけり
すさめかしこのとりとりを　左の方
ハこのこれとくらへよりあらそひて六波羅
のへなり侍しとへなり
中宮　藤壺也なり
さしてはかくの絵にさやうに見えしかると
光源氏の王昭君なしハなりしてあはれ
なる道といへのいとあはれハ女の能しとこ之
り道ハなく勝くの絵をなし押し給
かきとのし気なきと思ひしいはんハなり

梅つぼの　秋好なり
とのしき　実なきぬ方なりさまよしと花
やらかしめらりてよき道ハめなとへ
たちとりを給　花宴云絵合ハ二度
ありしめハまつ梅つぼの御方にて内
の御絵し合給へり後ハ弘徽殿にて梅
つぼの女御と弘徽殿の女御との絵
絵と合給ふ云々　此御絵は遠まく
て次位との御絵し見て多かる
梅つぼかし内にハうちにて大しハいつく
なきたへきやいつく後の絵合ハまし給

是ハし初代三今もらしの作者く
梅壷し弘徽殿の御後と藤つぼの女御
の御方きそ女く今ま参りしや三人の
志しめ乃ハ三月十日比なり
梅つぼの御方　左方なり
右なりハ　こきてんの御方なりや
あらそひしらつよしとも　三七ねすま居
とはより　梅つぼの御方なり
うめつぼの　弘徽殿
あま竹の世くしありしたるのこしめしとき
めみらんし　其の詞と其の竹とり此

手ともめとて為の何と竹とり
色なけ出としハ昇下三ゝありし
かくや姫の　右方のこと芝なり
りくし給のりしニよ　内裏よりめしけれ
ハさしてくのりし事なり
あ屋のおほしか　右方よりやさし多の詞と
竹取の翁よありくや姫ハ天人なれ
ハ凡人よありしとて雖然なりそのとも
とりてしそのことろまりしきく
むかしよりしかハ我善業のまれ枝又
ハ火鼠のかはころも又ハ燕の巣の中

なりこや見ちしとりしひりし右大臣
安倍多ハりろうしへひ抹ところのそしれ
てみせすして金とつきまひし君うき
りとてしとりかくや姫のみまやけとてハ
くぬこしすゝめとて火にくへひめく
くと焼ぬる道よりあしなしといふ
ちしまれり　花なりし馬
くりしの見んこの　親王まや色くや姫
蓬莱人へし蓬莱の雛みのと云なりく
引て見つりよしひく玉枝と造出く
姫よ見んをけり時玉造多め工みなふく

緑の赤トと責けりまて　遊駅下無曲
のりきこち時姫きすよこし　そのえはの
さ道う玉の枝りとかうとけりしよあのき
ちはけめりとあやまりとけんとハ右方
りくや姫のえはふこりぬめりなり
ことのあかを　金器子云　見花多
かりのきとなけし　みしと給くられ
そしけ　十二三栄の時を唐使　玉波
斯回阿陀羅伐木きり　風孝心書肝
伐之木造琴十挺絡伝曲お波斯国へ
人命海朔お禁中弾琴時不時浄

雪あらし端ちるらん
あらひおもしろし　右方此人右をかめて定
三ハ隠しみりまハ左風　定長朱雀院代人て
左よハ其こゝろりおもし　右勝て
り世ねより　左なり
正三位　右て又右まさるへよやらんいか
かゝりとの世しゆらん
雲のよへは思のいまゐ　左方此哥も
伊勢の海のうきもゆをよれ
まくしあらし對してよめり雲の
しよハちひろの海をえいよりしとん

正三位の給ハ禁中の哥合也
左衛大君　又正三位の中此人けりてし
左近中将とく　為雲の勝しつ花
月のめくみありかしめ　落雪との
渉寄て大菅のみなめしそ方りうや
しかりも名とハやハこりめんとて
一巻此しのたぐひ　張句の番私要とあ
隠岐まりり伊勢物後正三位より後宮
末の番此事て宴迄ハ内との合て
しのを家乃を　椿葉し弘徽殿のと
今ありてまこれをとくとのもとせ

多まゝ多少しなり
御まへかく　まことの御前まてとへ後
のあひのつなりこれ八三月ホより之
天徳哥合の様なり　花のころあ
須磨明石の　左近の桜をあつめ
れちんのへあり度し
よりけさ哥合　如くこてあかよしあり
年の内ふ哥合　一年中節會て
矢長乃　相あるし此しよりき也八次ニ哥御
世かしあり
きんりい　繪書て　此絵八ふ忠々子金岡筆之

えんよ玄記らちんの扇て　源の菅家
遠あり袋に入させ給とはつよや文沈
とえりすし多めりたこまてあるくよ
りや玄ゝし
左近中将　住ともと形し
少しうくきめの物なれ　朱雀院哥
なりの御裏とさあそらし御してよませ
多まつへハ哥八左てつさくの之て進
とえしのとありとハよりの御世う
ろこハなつしかとあり
菅たんゆしのよしと　ちか殿までの

別のくしやうのと云う虫くむしせめんさし
とハいゝ云り髪の奥とすつしおてしく立上
の金紙と傳しれよりへよりかん門ハ
此金液あり経てんこまてすり物之をと
云めれらしハ前しあるね　舞代のする
そはゑかし方となり
御むくれりや　双紙の詞なり
院の御繪　朱花は御恩朱花の名は
母君の御方より傳て中宮の御方よ
ありて弘徽殿の女御の御もとへと
移くしやとなり

内侍督君を　院の御絵し付ていれ出ける
右左の　左梅壺　右弘徽殿なり
女房のよそひは　梅壺方ハ御傳子
と云けり清涼殿の西の庇にてある
なり南ハ左方座也北ハ右方座也後
涼殿ハ御殿の西なり　花をさし咲き
左ハ云よんの紫よ　紺ハ紫檀の昔に
入て蘇芳の木にて造まうろ花足よ
よりも又下にく云ねとへし其敷物為
紫のつとの縁をしら数ハ机とよへり
此敷を云ハ蘇芳染のうへの縁と云

赤見花鳥

ワかハ上人　此附給ふし元三のめてたへき
用なり又有夜れ　つき見ハ去年
のくま紅梅も水干のうちれやうむか
ねなりあり多のうちとくさん桜さね也つき
も紅夜さハみす領之あさめハ二色
三色つきめか柳も夜をさ録ハ押りてら
もて裳うら萌黄といふなり
赤ハちんの領しせんつうみ也　とんつうハ流
の法木といふ下机と作ありあゆん
乃くきとハ花見とうしとくうや花見

ハ若木まて作りとは見こ次第
そもる
表あさ多よ柳のうさと　なあさり
うちうさん柳の花をあり　一説あをとしハこ
きりえさん萌黄のまへりうめりてあをと
多しありおゝり表多ハうりやさて裳
小あくりしあり多あり柳ハ面白く
らあさきといふ裏ハ卯花といふ
山吹　面うらてくちて　裏萌黄なりといふへ
くの女房もへきりへし　うへの女房大
典侍筆綸よて前ハ左後ハ右をいふも

も赤み青色ときこえしかしや此ともの表未
舞楽しきこえけりこ刀の地数をれハ
うしのき右ハこ海の錦しあり色又た
ハ唐禾右ハ高麗手しきこえしや　老んし よくより
帥家　蛍家て　左右共判者なり
けよしありて地きぬらし　中なりを
結ぬ好ほふ少しあり
ことしきめしれハあらて　家あしとハ
辛余しめあしハあかましきし見て
ありさて地きのまるすきめ結なやう
やあらんとぞり

例のきれとも　絵ハ常し筆なとひ
ころりや
紙絵ハ勿紙りありて　着ハ多く絵し
書しあり跡ありてとハとけらし画
なり見をほくきぬおり直ることをと
きりて書ひくきとしなへとのう
なり今のあきらめなともむしをあ
とれちらあくとハなあさり何ありさり
あしりの字あしかきなきとれり判
者の名ハ私むし少し刀絶なき絵ハ
弘徽殿のきぬはひなりや

あさ道いの　な　朝餉の世しの陰ますとめ
て浄蓋とひくへし　あさうれいの
間とてしあり天子おもくこさいる不て
りいくく　源氏のけいは詞とくえへ給へ
れなお　左言まつ宴すても一歳の稽へ
と一歳なりし時次ての三出より
さいくとりな飛　何　有顔回者好学不
遷怒不貳過不幸短命死矣　論語
文人数奇詩人薄命なり　文集
かんさいの　世にまつりつりのとかく
とくへさまいりし　かしあり

みりひよくぬく風あく　今ハいよりても筆
ハひれまて　みりよまくひあくぬとあり
かくすまりくしき　以後今しら海にこ
と生しおよすりとのぬまよなり
何乃さえても　帰の家にとし筆あり
と道もの　とかわの地に書うりハ繪にし
碁乃事なり
家乃子は中ふ　高き家のそのみとし
もよくまなひ好人よりまさくまさまれ
とおもあ道かしあり
文をとは　きんさいしもむていもれハ不及云て

琴ひき給 きんとよむへし
ませり九 此説はくはしく詞ありいかへ
のあとまをといふ まさなく給とらく
りんぬしあり
廿よ日の月ほのかに出て ちしめ給ひ給ふゝ
十日比あり斗ゝまさとハ中殿の御
しきまてたり達するなり
あしのつき 書司ハ女の官也 和琴を
執ゝまて和琴とてもさもとの文のつきし云々て
あやし濁てよむ夜比書ゝし要候
猪中納言さハいふと 源氏を次てく人

おほとのこもりしき ちよし給ふ後 さい
さうらふ女十人拍子と云野曲の事
文章て 別て録とゝまへり給て九
中宮あり うちて書なり
この御かはりしハ いさてんに不との
御心さしのあれあり
ゆくへよとらし 寶なる事と存って
又御抱きあかしかりとありしなり
此御時よりむ世のことくさし 延長天暦
の聖代といひありしかとも冷泉院より
天暦よりはくへ給なり給合の例しに

また天徳の歌合も此御世にてなん
むかしにはあめしと見聞ゆる　河海に見
拾遺古事を引證へとさて
此御世には　冷泉院の御代なりけるとあ
ひ侍まうてつかなり
ありときこえし　命ぜし事とおもひつゝ前
ふかくおもひ入てさかり万ののゆかりかへし
御書作らしを給　嵯峨の御書なるべし
松風の書てひしきなりとて
まとの道　久寿三十萬字明石姫君
とりてこそ見てゆきしにかなり

いろは松ほし

双紙の此頃なり

松風

巻名ハ哥の詞をとりて号する源氏
君三十一歳の秋より冬まて也同年也
東院作りたてゝ　二条院の東なる院なり
也北の対まてより造りたまへし凡也
西の対いとくらひけて　花ちる里住
給ふへくあり政所家司ハ花散ハしかれ
事ともそなりゆくなるへきつきつきなり西東乃
対ハ寝殿よりのひしひかしに
ちんてんハ　時々渡り給ふ御すまゐ所とある
ところつひろく御前よりは海の

説あやまれりとこ
中々きてしけるなる道ぬ　渡ちかあたりに
あたへひとしも中々おもひまとはして
中々心も得させて　のほり給ハ道て
ひとへさまのそれも中々ハ苦しうて
母君ハ渡りの中務　む　周西渡子の前中書王
兼明親王　号小倉宮明石の尼上のおほちにも中
務宮なり兼明親王に比してけり
民部大輔の君　民部大輔伊行　兼明親王二男
すゝしくより　見えたる
なほしかくても　つまはしと中略したる詞也

ちらかさ　らく多り科なり
菅家のけちかひと　内蔵頭迄九寛にて
ハ神にとめさせむ為し
口義のさて帰そとし神にた　田舎し何
のちえもなくて見し様れハなり
後の世に御霊ハ　大学寮の南にハ神
家ちはなくて書り　彼寺ハ離れ山に居て
その清浄なる地ふてる何様治りして
栄えの名高く尊し神なれ　宇多法皇大
学寮へゆかれて　大学寮ハ宇多院也
写なり

是ハ何のいはれかあるぞ　大井川家のゆさ
いはんあるハ菅家の昔よりも世にもなくと
いはれあるや
口伝ハ口義に　されハさてとも詩歌にて
年ふるふにて庵とも　明石の入道
庵にて別の住しけるも見給
みかまえみなれて　こゝに迄末ハ水也した迄
あめとはふるなれハなれなりなるへし
うは迄末のぞなれとしてむしと菩提
まかなりとしもあはひとてしれ　安藝
河
みかさ迄不の見かけれあかれてなかれ迄なく

こゝにかゝんや立しかゝしや
むしの孫もとりあへめゝし　別紙抄りが
あハさいちっさ〃ろりむしの孫もとり
ほへぬるしハいっかりや
まひりもん玉の　夜光玉照車前後
十二乗ニヶ　乗光玉珠照人云妍醜皆
巻くとこと云へり
あはされ数ハいそき　ひとり野中と
今さへしきりけれへなりあなれと
数ばをくぬまてしいハなつ
いそしけりあり　双六のれこと葉なり

こゝらめうつゝのりて　明石乃ぬことなれなり
いまて文　ゆよて文て
とかれとふれもちて　明石入道とと云わと
ときうめりなりぬへし
まうし仕て　入道の詞ときれゝしたる乃
りてもとはふ八双六のことにちて文下
八入道のこと葉なり
世中とよくゆうしめしれ　されのうととや
めやよりし東ありけり聞へなめてきりし
さきのてすなりあし
人まことをて進ふしと　れのかりをせしとなし連

幸ひなからん行しをせさせいりて　娘ゆへに
入道のはらくるしくおもへあさましきなり
錦とて　此度綱もまて下の綱よりもや
ことはりも秋の錦のへて又ふかきにか
やうのものともあり
河
富貴不帰郷如衣錦夜行
思ひけるくて　ゆかひきよし源氏の
此浦へくるありさまなりけり
君とらは世語の聞へさせひけりよそれは
入道の婿殿とよりて也
天しむけるる人の　天人のありしは男なきは

まて又天しめるのみてことわりならへし
命つきぬとおもへしめ次らも　以下の詞と
夜の夜しるやつ遙かなそすまてなりあり
こを何の茅葉の事を聞き童隠不用と
昔此人を爺といはれは　かのくとの夜此仏
とりてひの爺といひなむくはいてなき夜
へこころなりゆりしるく書付しきりてし
はきしはへりけし　ましきし方とは変世
のおすてゆめの濡とは落しきてくり
いくらり錦の秋と　ことおもしのりてと
八丹のへてこきあり分といはへあり

ちとせをいのりし　源氏の御方はさて
きかれ(?)ぬ大井の家の宿にして
名をとへてひとりなくなる　名をとへてあ
らぬ世の人もすみし閑(?)しゆゑとハ
昔尼君に別し後人なりてし尼君を
めかれしハ侍りぬし人ハかへりてしとも
ゆ(?)まてもみえぬ
其よみし世のむかしと此友ハ昔の友なりけるへし
ゆ(?)道のまくらんハ哀む人をなけれしや
そしみえへきても侍ると　侍従(?)に書きし
給ひて大やうしてとの給ひやらで又よの

詞しかのいは意はしをうらみなれ給ひの
れそひさえへなれりしあ道ハ別とハこゝろ
文ありし権(?)院あし御覧給ひてのともしとある
権院と云前(?)職(?)かくろ世給ひとまくハ
此詞も弟(?)とのちやうして大井の御より
のゝあるしハ三(?)のおりて権院よりえ給ふ
とかしての給ひや権院ハ権大納言とこへ
給ふや大夫の道なんと右近(?)御院
ハ昔(?)の世の侍給ひしありさまやまれ侍て　乃尼君(?)
とのゝえきへあらしあ　ひさしかれ(?)
例のくへ給ひし源氏ハ　源氏と(?)

の後へ乃御おもしかくぬとすり
いみしへさまのまうてりけりし　源氏は須まへ
たいせいへのやうしハありし人ともおもひとく
思ひ出つるものゝやうにと　立帰りと存思
関しりひありりし　なり
山ちら　御ひき乳母はりし乳へなり
ゝのかいあろ所し　東流のゝのく
帰ろかへき所とのあつりとくかへくろも筑司
なしふ　大弐の翁は子すくあてしもの東
須なこのゝすしや
福流ま須り給ふへし也とし　云比境

一筆ちりくて此大弐へ聞さしりゆかり
かく所とけさし帰くるよとあひなきほとき
不逢悪乃りひく思ひありしく
とり給ふまく　源氏と海なく給くをも
なしひへあめ給しすとも思給へきし京此
まりむしともハは海まらへし君ま求なしの
まりなくへし
しらきにちろ　此海此京てし官て帰ろねへ
見ゝのすゝ給けり。　中将ハ紀伊守ハを
まとお使さ出し給へり房の涙を称
きしれやすし平下の詞とうゝきめん也

てば親王のみこの御名妙書頼ありと云
形見として忍ひかたしや猶しく　形の音をも
ききとるへきかたなりかしとはくちをしくなかく
又云つくりたまへるやりみて書も出来なると
ことはりましく書たる事のかやしや云を
侍れ人ハこ有て　こりてハ中しまて
法やうのへなり源氏君の見えのす
その絵へも尼君ハ妙法めくなり
為ひのあひまひ西白云
いろ并ハちやくの　らいさ紀書じたへ
御ものかりとりハきしるとけすへて

十六日弥生　仏の縁日なれハうやまて
月に二ツひたりの法ちかくりすなり
ハ此ゑまもりなるへし
ふもんかく　舎利講ありて云ことしてち
德と称じたりなり
ありし来りて　ありましてむへ
被きんのれいとし　形もしなしのとしても
まさへともかた次　とれやうまで
御よありし御名の春ししはきかかしぬる
小さくて次あて　楽しけのてのて
つかはしとし楽しきこと後　松の外にきりし称して

うへしすてハ承なく躰とかへしあり
里遠しや　里遠きいかしせむとか〳〵此
心ハ立よりしを心ゆハ出てなめん
すゝしくともいてくハ其あれ躰をなとゆかふ
人につゝとせめとの給へハ　立ハ思て
人こゝにもなと宣ふ躰へのやうて
几帳なともなくて進　すこしく違ふなり
ちかきハかへ見ゆるかこし葉あり
あなかしこ人すむ所へ文　双紙の詞て
はしけあり諸人と心ふかしと有り
心つきなし人に　中川の紀伊守か事也

ゆけいのせうとてこゝしかへりえ
てらは五位を叙しぬりあり　抛けいかん
きし方の物も進ゆ給ふね
世の詞も宮の方比の躰も心進め
うしけすて中かくしに進へかふ淵
風光給ふハ大井川の流りのり躰かん
あり月の事あり
やへより山ハ　是より女房の詞也八重立ハ
雲のかなり山重此さひしきハ明ん
の話て進しをて次とあり
打とむしの　進とも心ら人又なん

まてならむもしらぬ人の詞なれ
ましと女乃ことへ中ことあり
ことよかしや我を思ひたまふらんもあはれにと
ゆけいの世にかゝり明石とハ良清か心
とけし人なりか源氏の法子ときこえまうを
てきれさ此歌のなさゝとさして打てうへ
うす所しやとハ甚多の人ハ心をとあらう
なかり所をこゝろなきさわしをあはれし
とハ良清か心ひしらすと聞て男此心
なる道ハ家をこゝろあれしこと思
出る依なり是と良清と花ちりしあ

そのなる道ハかハりし都はしめし多くの心ら
出や文云歌をこゝろなきさわりとハ
須磨明石かくの浮沈の中れハ歌れし
あかとりもかりや女房乃語をる道すし
みこれをしこゝあかよしとくれひかうし合
て家さとくれひも出やの心やや云
とこし定めしハ然とさりてとこそ
乃中将書語　　道をしけし
ことりこゝしゝり　小言ハ萩すて付えて見紀乃
川の海のあやしけれ道と　酔中し存
らえきくの事なり

せく　ありくともむ色し
ゆかり人あるひ　御抱有り
殿上人など人　御遣とも申し
入まいらせ給ふなりと　御使の舟を詠へ
舟ハ遣ともいふし
今ハ六日の御抱いを　見え河海但何の
之事くとも六日事してつゞきありしや
月乃舟も川のとらなか　榊院ハかつての
星ハ未へ持つりけるもんハ乃てそ
川をすぎて物りけるのへといふ哉へて
とらハかりまでのらして遣わハ月もそ

きぬえりかへしけ　二義なり
御使の舟ハきくさい遣ハ女乃ゆくみて
よく之遣ハ舟しハよろこびけ給へて御
下女の嫁米といふハ表つくさね女房へ
唐衣ハ女のよそほひ物なり
久かたの光まちかき　月しらけあま星
なり遣ともいふ雲のかよひしまて見給へり
翠下の御へなり雲葉有てあそえ
光なくしと云へて下の御殿の御ほし
こそ名はありけるなり久きより
中しかひよる　久かたの中しかひよる星

従ハ光とのゝうたのむねへてあるところ義也
いうとなしみゆる所なり
はあうら鳴と　此二ツにて凡のいしるりん
所つくして　ありらして何波とちるうしよ
めならのなり
めくり路くとまひとみハり　源氏の御分
御ともしけのらくさや所ゝへなり
右大弁　ことましあし
雲井之人の梅はさそく　いう道の名ハ義
の名に古院の御子の事　又云源氏の三
つまかひしうと云ろ出ろしつやうしいあし

き御方のいけれ名しこりしけろ
あひきんとの心なり
宇つさくてなん　作者のこし筆なり
近江つきの名を記を録りぬ此みしとも
わの名としいゝハを清の合の中しも秘よ
毛しあり物語物名にも勝こて云ありと
ハ官人よりまことなも清くて云録りハ説
見しあるなりて　秋を花事　物節とハ役者
のるなとりなる名さうきハ名ををしうるや
とろこ西なて　甚鈔て家し来うつ筆
ハえりて為ハとりつくん　許呆

めきけ給ふと　人よめよしけ給へ
すいへいかゝぬりしを　よめる人よ似ぬれ
若紫といふて書出せへ給ふなり
これハ我と云前に給ふ　むらさきのうへ
のゆかりの心二條の北方と共にをしたり
其あくみそし　源氏のうし某なり
此御のとこ給はよ　此君の姫君之家へ
いもけ多年給ふ三ゆりけると手習ハさん
をわか紫のゆかり
物かたれよのとなりけり給へ
むらさきのうへのことなり源氏乃

御心乃為にてしありやそよゆりきん奈
此の紫のゆかりありそれ気色あ
まり九云ておやうしあられやハとてく
すこしをきくしきもかなく云れとん字つ
なゝやハとをしもとし句とさりて心つて
いとせまし　源氏の御事なり
お給ひて物ゆりをしかくけれん
あしのうへ乃ことなり